

# 岐阜同朋

ぎふどうぽう

- 蓮如上人と美濃の真宗—美濃真宗の歴史② 安藤 弥
- 「同朋の会」のすすめ 敬念寺の雅楽会
- 雅聲會 ● My Book

2024.06 **130**



敬念寺 雅楽会



# MyBook



この本は、岐阜高山教区第4組光澤寺の竹市昭英前住職が約3年半かけて執筆した遺作である。

「ほんまもんの中身の話がしたい」

著者は序章でそう訴える。今ある現状を正確に見ること、そして「仏教の教えに途絶えがないこと」「仏教の流れの本流は何かということ」を追究し続けた。現在語られている仏教の歪みを指摘し、時間の連続を心がけ、空間(場所)の連続を見て伝えている。上下巻で幹編第1章〜第6章、枝葉編第1章〜第4章。上下巻合わせて、1094ページに及ぶ。

上巻では、お釈迦さまが語られたことは何だったのか、最古の經典『スッタニパータ』『ダンマパダ』から読み解く。「お釈迦さまの話は難しいものではなかった」「講演ではなく、対話であった」と説く。

手に入るテキスト、あらゆる研究者の著書、論文、地図、遺跡の発掘記録を読み込むだけでなく、実際に現地を訪れ、思索を深めた。インドのマトゥラー博物館 パールフット・ストウパーのあった場所、サンチーストウパーの周囲の丘の上にあるストウパー、中国の蘭州の炳靈寺石窟、ウズベキスタンのカラ・テパ遺跡は、渴望し訪れた箇所だという。自身の目で見て、現地の方に話を聞くことで往時の威光や信仰の根付きを体感した。

下巻では、「無量寿経」の優れているところを述べ、編成、挿入、リトライをその經典自身が許している唯一の經典だと、教えの流れの帰結と出発について著者の考えを説く。阿弥陀経、漢訳無量寿経について内容を図表化しながら読み解いた。

後文には、「私は本当にお釈迦さ

まに会いたいです。いっぱいおしゃべりがしたいです」とつづった。著者は仏教の話をするとき、目の前のひとりの人に向かって話をする。最も心がけた。お釈迦さまが一人ひとりに対して、その人に最もふさわしい話をされたというように。

著者は2023年1月に亡くなった。ひとりでも多くの人にこの本を読んで聞いてほしい、そしてどんな意見でも寄せていただけたらと述べて嬉しくてしかたなかっただろう。著者が追究し続けた「本当の仏教の話」を聞いていただきたい。

(光澤寺坊守)

岐阜新聞社  
各巻 ¥3,300



## 編集後記

仏法はどのようにして傳承されていくのだろうか？

教えを聞いたからか？ 仏教者に出会ったからか？ それとも何か道に迷ったからだろうか？

そう考えてしまうのは教えを聞くのに大層な理由がないと思うからだろうか。もっと簡単なことではないか？

御仏供を食べて育った。お参りする姿を見た。お斎が美味しかった。親が熱心だった。生涯学習に。ただ気になった。様々に思いがあるかもしれない。

だからといってお寺に来るわけではないだろうけれど。傳承される事で必ず出逢った人にとっての精神生活の礎となる。

また、正信偈を勤める事で生ずる共同体の意識から仏法を共有してきたのだと思う。

(ウッチー)



【写真2】竹鼻別院山門（羽島市竹鼻町）



美濃地域において蓮如上人の裏書を持つ絵像本尊は、専精寺（不破郡垂井町）が所蔵する長祿

三（二四五九）年の一幅が現存最古で、その後、明応年間にかけておよそ三〇点近くが美濃各地に見

出されています。さらに蓮如上人の後を継いだ実如上人の裏書を持つ絵像本尊も四〇点ほどが知られ、それだけこの時代に、美濃の各地に真宗信仰の拠点が生まれていったこととなります。

あらためて蓮如上人期の美濃地域を見渡してみると、まず、不破郡・安八郡に近江国（滋賀県）とのつながりのある門徒集団の存在が見出されるようです。安養寺はもともと近江から美濃（当初、安八郡）に移入した可能性があり、一方で湖北の有力な勢力となる称名寺は美濃にその発祥があったとも言われます。

また、郡上郡を中心に飛騨国（岐阜県北部）・越前国（福井県）からの門徒集団の展開がありました。特に飛騨国白川善俊門徒の系統は、おそらく白山信仰の展開と重なりあいながら、勢力を伸ばしたと考えられます。

木曾三川流域を中心に美濃・尾張にまたがって広域的に展開した門徒集団も複数あり、なかでも特に河野門徒の存在が注目

されます。蓮如上人は河野門徒に文明二（二四七〇）年に親鸞聖人の影像一幅と絵伝四幅を、文明十八（二四八六）年には道場本尊として阿弥陀如来絵像を授けました。河野門徒には、蓮如上人が来訪して「木瀬の草庵」（現・羽島郡岐南町）を復興し、「河野御坊」として信仰拠点にしたという伝承があります。この「河野御坊」の由緒を竹鼻別院が受け継いでいるとも言われます（写真2）竹鼻別院）。

美濃における山間地域や河川流域を生活の場とし、渡り歩き、移り住む人びとが、蓮如上人とその教えに出会い、真宗門徒となっていく歴史の様相がうかがえてきます。



安藤 弥（あんどう わたる）先生

【プロフィール】

1975年生まれ。名古屋大学文学部卒業。大谷大学大学院博士後期課程仏教文化専攻満期退学。真宗大谷派浄専寺住職。同朋大学教授・佛教文化研究所所長兼「いのちの教育」センター長。博士（文学）。真宗大谷派擬講。



# 蓮如上人と美濃の真宗(1)

## 美濃真宗の歴史 ②

安藤 弥あん どう わたる

前回(初回「美濃真宗のはじまり」)は、親鸞聖人逗留伝承(「木瀬の草庵」)や、岐阜別院に伝わる光明十字名号等を本尊として礼拝するような初期真宗門流の地域的展開が木曾三川流域を中心にうかがえることを紹介しました(南北朝～室町時代)。今回は戦国時代における蓮如上人の教化(布教)活動と美濃との関係について注目します。

美濃をはじめ地域門徒の存在が各地に見られる一方、京都では親鸞聖人の墓所が大谷廟堂となり、さらに寺院化して本願寺となります。初期真宗門流の時代(南北朝～室町時代)は必ずしも本願寺を中心とする門徒集団の強固な結集が見られたわけではありませんでしたが、戦国時代に至り、長禄元(一四五七)年に四三歳で本願寺の住職となった蓮如上人(一四一五～九九)の教化活動が大きな画期かつきをもたらします。

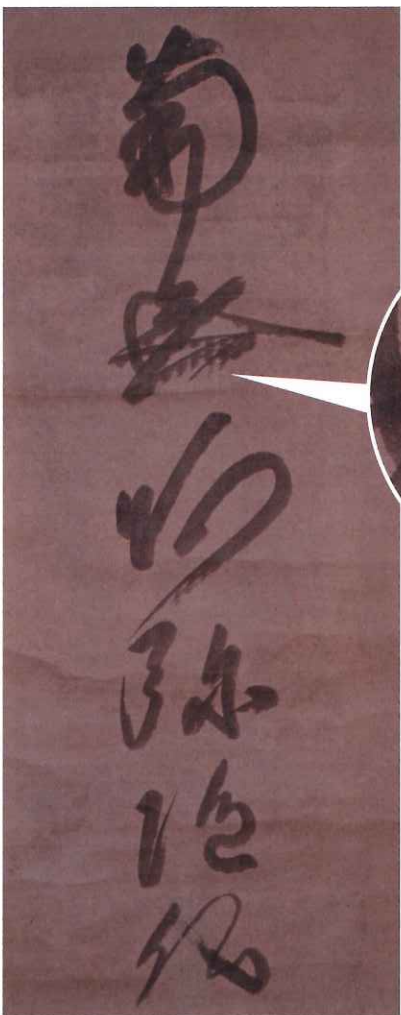
蓮如上人は本尊が阿弥陀如来、宗祖が親鸞聖人であること

を明確にし、本願寺を中心とする「教団」を形成していきます。具体的には帰依した門徒に「名号ごう」を本尊として授与し、「御文ごふみ」によってわかりやすく教えを説き、浄土真宗をより深く、そして広く、各地域に伝えていきました。蓮如上人が墨筆でしたためた六字名号は全国各地に数多く残されていますが、これは門徒一人ひとりが目の前に本尊(六字名号)を掲げて礼拝する生活のはじ

まりであったと考えられます(これまで以前、本尊は限られた場所にしかなかったとみられます)。蓮如上人は名号を畳むしろや筵むしろの上で書くこともあったようで、墨跡が斑目まだらめになつていいる名号もあります(「虎斑こらふの名号」と呼ばれています)。美濃地域ではたとえば安養寺(現郡上市)に現存する六字名号が典型的な一幅です(写真1)安養寺蔵六字名号)。



蓮如上人の教化をうけた門徒集団は、さらに地域における信仰拠点として「真宗道場」を構築していきます。この「真宗道場」が後に寺院となつていくのですが、当初は寺号や伽藍を持たず、外観は一般家屋と異ならない建物であったと考えられています。この「真宗道場」には、蓮如上人から授けられた阿弥陀如来絵像の本尊が掲げられ、そこに地域門徒が集つて仏事を行いました。この絵像本尊の軸裏には、蓮如上人がいつどこに誰に授けたかを明記するのが基本でした。これを「裏書」と言い、地域門徒の存在に関する貴重な同時代情報を読み取ることができます。



【写真1】安養寺蔵六字名号(郡上市八幡町)



## 「同朋の会」のすすめ



ちに「思うように音が出るようになってうれしい」「合奏の際、音が合うと何とも言えない綺麗な音色になるのが心地よい」「雅楽だけではなく邦楽などの知っている曲も吹けるようになるとより楽

合奏の練習は自分の出している音だけではなく周りの音とも合わせながら演奏しなければならぬ為、一段と難しくなります。会員の方々も練習を重ねていくう



しさがでる」など雅楽の楽しさを伝えていただけました。  
当初は全員が、雅楽初心者の方々が、雅聲會がしやうかいの先生方が熱心にご指導され初年度の報恩講に出仕する事が出来たそうです。しかしその後、新型コロナウイルス感染症の為なかなか練習を開催することが困難な時期が続きました、一時は会の存続も危ぶまれましたが、会員の方々の思いと努力の結果、毎年雅楽を入れて報恩講を、勤めておられるそうです。







# 敬念寺きょうねんじの雅楽会

(第1組)



今回は岐阜市西荘にある敬念寺の雅楽会を訪ねました。西荘には織田信長、足利義昭ゆかりの立政寺など多くの寺院があります。敬念寺はJR西岐阜駅のすぐ北側に位置しています。こちらの雅楽会は2019(令和元)年4月に同朋会の組織として結成されました。現在10代から60代の男女11名が会員となっております。結成のきっかけとなったのは、お寺から真宗本廟の御遠忌に参拝した際、雅楽の音色を聞き自坊でも雅楽を出来るようにして登高座したいとの住職さんの思いが始まりました。初年度は全門徒さん宛に入会案内状を配布し、説明会を開催しましたが、なかなか雅楽に興味を持っていただくことができませんでした。「住職さんから常飯の際、誘われて丁度何か新しい事を始めてみたいと考えていた時だったので60歳を過ぎていたが参加した」「坊守さんに誘われ、周りにも雅楽をして

いる人がいなかった為、逆に興味を持って参加してみようと思っただ」など時間をかけて住職さんや坊守さんが直接お誘いをし、現在の会員が集まりました。練習は月に一度、日曜日の16時から始まり18時頃に終わります。前半の1時間は各パートに分かれて練習します。雅楽は邦楽や洋楽とはテンポも歌も異なり、まずは唱歌と言われる歌を覚えるところから始まります。会員の方々も聞いたことのない歌を覚えると共に当初は全く音を出すこともできず、「馴染みのない曲ばかりなので吹いていて合っているか間違っているかさえわからない」「息の強弱の感覚がわからない」など苦労していました。後半の1時間は皆で音を合わせ合奏練習です。雅楽の管楽器には笙、龍笛、箏、三種類の楽器があり、それらの音が合わさることで神秘的な音色が生まれます。







## 雅聲會

がしやうかい



管弦は「世界最古のオーケストラ」と呼ばれています。

また、指揮者が存在せず、互いに間合いを図ることで演奏の調和が図られるのも特徴です。

雅聲會では会員を募集しています。音楽に興味がある!何かを始めたい!!

そんな方、是非ご連絡ください。経験者が丁寧にお教えいたします。

教区内別院の法要や一般寺院の法要等にも出仕致します。

興味のある方はお気軽に別院、教務所にお問い合わせ下さい。



「同朋の会」のすすめ

## 敬念寺の雅楽会



報恩講当日は会員の他に坊守さんと娘さんも加わり揃いの装束を身に纏ってお勤めに出仕されました。

年を増すごとに演奏する曲数も増えていき、昨年12月の報恩講では三曲演奏されました。法要後には参拝者の方々からも「なかなか聞くことが出来ない体験をさせてもらえて大変良かった」「音色が綺麗で素晴らしかった」とのお声をいただきました。出仕を終えた会員の皆さんの顔からは緊張から解放された安堵の笑みの他、無事に演奏を

終えることが出来た達成感と喜びに溢れていました。

また、会員の中には報恩講出仕後に残ってご法話を聴聞されたり、別院の報恩講に参拝されたり昨年では真宗本廟の慶讃法要に組の団体参拝として参加したりと、「雅楽を通して念仏者が誕生している事を嬉しく思っています」と住職さんがにこやかに話されました。

昨年12月に行われた報恩講の演奏を下のQRコードから視聴いただけますので是非ご視聴下さい。

